

熊野直樹著『麻薬の世紀：ドイツと東アジア一八九
八―一九五〇』（東京大学出版会、二〇二〇年）

北村，厚
神戸学院大学人文学部人文学科：准教授

<https://doi.org/10.15017/4377854>

出版情報：政治研究. 68, pp.77-84, 2021-03-31. Institute for Political Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

書評

熊野直樹著『麻薬の世紀——ドイツと東アジア一九八——一九五〇——』

(東京大学出版会、二〇二〇年)

北村 厚

—

本書は、一九世紀末から二〇世紀前半に至るドイツと東アジア(主に日本と「満洲国」との通商関係を、阿片を中心に具体的に描き出した画期的な研究である。阿片といえは、一九世紀半ばにはインド産の阿片がイギリスの貿易商によって中国に密輸され、二度にわたる阿片戦争をひき起こしたことが、世界史上の重大事件としてあまりにも有名である。しかし、ナチス時代のドイツと「満洲国」との間に阿片の取引があったことはほとんど知られていない。そしてナチス・ドイツと大日本帝国が崩壊したのち、それらの阿片はどうなったのだろうか。本書は新発見されたものを含む一次史料を駆使してこれらの全貌を明らかにした重厚な実証研究である。

阿片は医療にも用いられるが、中毒性の強い麻薬である。グラッドストーンは阿片によって引き起こされた戦争を不名誉だと断じ、二〇世紀には国際阿片条約によって禁制品扱いになった。砂糖や紅茶などと違い、阿片はいわば闇の国際商品なのである。その阿片が、第二次世界大戦を引き起こしたナチス・ドイツと日本を結びつける商品だったというのは、衝撃的である。阿片はどのように独亜間を結びつけることになったのか、何のためにナチス・ドイツは阿片を必要としたのか。これはいわば世界史の裏面を覗き見るような、極めて魅力的なテーマである。

本研究の研究領域は、「独亜関係史」に当たる。ドイツと東アジアとの関係史は、かつては日独関係史や独中関係史といった二国間関係の外交史研究にとどまっていたが、東アジア全体をも含めてドイツとの関係を探究する独亜関係史は、ここ最近になって注目を集めるようになった。独亜関係史の最も重要な研究成果として、長年にわたって日本での日独関係史研究を牽引してきた工藤章と田嶋信雄の編集による『ドイツと東アジア——一八九〇—一九四五』¹⁾があるが、著者はこの論文集に二本の論文を寄稿している。本書のサブタイトルが「ドイツと東アジア 一八九八—一九五〇」となっているのは、工藤・田嶋編の論文集の主旨を継承し、かつ同じ時

系列において「麻葉の世紀」という裏面の独亜関係史が展開されてきたことを印象付けるものである。

二

まず本書の概要を紹介する。本書は序章と本論七章、および補論と終章からなる。

第一章「二〇世紀初期における阿片と独亜関係」では、阿片という国際商品の概要と、一八九八年に膠州湾を租借したドイツが当地で阿片政策に着手して以来、阿片をめぐる独亜関係が発生したこと、そして戦間期の一九三〇年に関東州でベンゾイン不正事件が発生したことを紹介している。すでにこの段階で、ドイツと東アジアの間には麻葉の密輸ネットワークが形成されていたのである。

ただ、ヴァイマル共和国期には阿片法が制定されており、ナチス期にも継承されたため、第二次世界大戦が勃発するまで、大規模な阿片貿易は行われなかった。その代わりにドイツと東アジアを結びつけていた商品が、満洲大豆である。第二章「ドイツ通商政策の史的展開——バター・マーガリン・満洲大豆——」では、世界恐慌下でドイツの穀物関税が引き上げられる中で、飼料用穀物として輸入が急増した満洲大豆

をめぐる農業界と工業界との対立が描かれる。大豆油はマーガリンの原料にもなり、安価なマーガリンは高価なバターに代わり労働者が消費していた。農業恐慌下でバター価格の下落と消費の低迷に苦しんでいた農業界は、政府に大豆の輸入制限とバターのマーガリンへの強制混合を要求し、ヒトラー内閣において成立した油脂法によって実現した。これはヒトラーが目指すアウトアルキー（自給自足）経済の理念にも合致するものだった。

しかし油脂法によって満洲大豆の輸入が減少した結果、ドイツ国内で油脂と飼料が不足することになった。そこでドイツは満洲大豆を安定的に輸入するために、「満洲国」との貿易協定の締結に乗り出す。第三章「第二次世界大戦期の独「満」関係」では、一九三六年四月に独「満」貿易協定が東京で調印される経緯と、それ以降の展開を追う。協定締結以降、ドイツの満洲大豆の輸入は着実に増加したが、第二次世界大戦の勃発によって海上輸送による満洲大豆輸入は困難になった。それに代わって注目されたのが、シベリア鉄道を利用した陸上輸送であり、独ソ不可侵条約と一九四〇年二月の独ソ経済協定によってそれが可能となったのである。

しかし「満洲国」からはドイツ側が期待する量の大豆を十分に供給することができず、ヴォールタートを团长とするド

イツ経済使節団が、一九四一年四月に「満洲国」と日本を訪問した。第四章「独ソ戦勃発と独「満」関係」では、ヴォールタートが「満洲国」を訪問している間に独ソ戦が勃発したことによって、シベリア鉄道による満洲大豆の輸送がつかいに不可能になったことにより、独「満」貿易の主要商品が満洲大豆から阿片に移行する経緯が明らかにされる。阿片であれば大豆よりかさばらないので、封鎖突破船で海上輸送を行うことが可能であった。著者は、ここでドイツが満洲の阿片を必要としたのは、イギリスの貿易封鎖措置によりインドやイランからの阿片の供給が滞ったから、あるいは東南アジアで戦争に必要な原材料を調達するための交換商品として阿片が用いられたからではないかと、データや傍証を示しつつ推定している。

そして、独「満」経済関係存続のための第三協定が締結された一九四二年一月には、すでに独「満」通商関係は阿片を中心とした貿易に移行し、その要求量は年々増大した。しかし、一九四四年になるとはや封鎖突破船すらドイツにたどり着けなくなり、潜水艦による輸送に切り替わることになる。この背景にはドイツとトルコとの関係悪化による、トルコからの阿片輸入の途絶があった。

一九四二年から四五年までの間に「満洲国」からドイツに

輸出された阿片は二四万トンに達し、そのうち半分が実際にドイツに到着したという。しかしナチス・ドイツはなぜそれほどまでにアヘンを必要としたのであるのか。第五章「満洲国」の阿片政策とナチス・ドイツの阿片・モルヒネ政策」では、「満洲国」における阿片専売制や罂粟栽培の実態、そしてナチス・ドイツにおける阿片・モルヒネの利用が明らかにされる。それによれば、阿片・モルヒネは、前線で戦う兵士を「覚醒し、疲れ知らず」にさせるために使用され、アウシュヴィッツにおける人体実験や、精神病患者・障がい者に対する「安楽死」殺人の道具としても使用された。ナチスが遠く東アジアまで求めた阿片は、ホロコーストの実行に関係していたのである。

第六章「ナチ阿片のゆくえ」では、第二次世界大戦の終戦前後の阿片をめぐる動きが追跡されている。大戦末期、戦局の悪化により阿片をはじめとするアジアの物資はドイツに運ばれることなく、一九四五年五月にナチス・ドイツは降伏し、それらは日本や満洲に残された。神戸の倉庫に保管された「ナチ阿片」は、空襲を避けるために「疎開」され、日本の降伏後、一二月にGHQにより押収された。押収されたナチ阿片は日本の通産省が買い取ることとなり、その代金約四九万八〇〇〇ドルは連合国軍総司令官、すなわちマッカーサーの

手に渡ったという。

一方、奉天に残されたナチ阿片のゆくえは、第七章「阿片と日華賠償問題」で取り扱われる。ナチス・ドイツ降伏後、奉天に残されたナチ阿片は日本側に引き渡され、「満洲国」の関東軍が引き受けることになった。しかしソ連が対日宣戦し、満洲に侵攻すると、これらの関東軍阿片の一部が埋められ、一部が日本に「密輸」された。唐津（呼子港）に密輸された阿片は、その後神戸から徳島県に渡る途中で新聞によってスクープされ、米軍によって捕捉された。押収された阿片は大日本製薬大阪工場に保管されたが、中華民国国民政府はこの阿片を、日本によって略奪された中国資産であるとして、返還要求した。そうした中で、冷戦の深刻化によって日本の早期復興を目指すようになったアメリカにより、対日賠償の緩和が連合国に持ちかけられる。中華民国側はこれを拒否しようとしたが押し切られ、賠償請求を断念することになった。しかし実は日本が阿片の買い取りに応じたことで、中国は事実上の賠償金を日本から獲得したのであった。この関東軍阿片のゆくえについては、先行研究でもまったく謎とされていたが、著者は新発見の一次史料などを用いて詳細に追跡し、その実態をほとんど明らかにしている。実証研究としての本書の白眉であり、圧巻である。

補論「コカと独日関係」では、阿片を中心とする本論を補完するべく、コカインの原料であるコカ葉をめぐる独日関係を明らかにしている。本書が「阿片の世紀」ではなく「麻葉の世紀」というタイトルになっているのは、独亜関係においては阿片に加えてコカも重要な商品となっていたという発見を強調するためであろう。阿片は満洲や蒙疆をその生産地としていたが、コカ葉の生産地は台湾、硫黄島、沖縄であった。日本はこれらの地で膨大なコカ葉を計画的に生産し、アメリカやイギリスに輸出していた。しかしアジア太平洋戦争が勃発するとこれらの諸国には輸出できない。実は日本は、阿片などとともにドイツにコカ葉を輸出し、ナチス・ドイツは日本から得たコカ葉によって製造したコカインを外貨獲得のための手段としていたのであった。そして大戦末期に輸送が不可能になると、阿片と同じくドイツ滞貨となり、日本に売却されたのである。いわば、独「満」関係は阿片が結び、独日関係はコカが結んでいたのである。

三

本書はかつてないスケールと実証の緻密さを兼ね備えた大著であり、いくつもの特長を持つが、まず強調したいのは、

本書が全く新しい歴史的事実をいくつも発掘した現代史研究であるという点である。戦前・戦中日本の阿片政策についてはいくつかの先行研究が存在するが、それとナチス・ドイツとの関係を掘り起こしたのは、ドイツ通商政策を長年にとたって研究してきた著者独自の視点である。それだけでなく、著者はまだ誰も参照したことのない新史料をいくつも発掘し、ナチ阿片のゆくえに関する新事実を次々と発見した。現代史研究にかかわる史料は膨大であるが、戦時中のドイツや日本については研究者の質量ともに高く、史料も出尽くした感があり、新しい史料や事実を発掘するのはきわめて困難である。そうした中で、独亜関係に関する重要な事実を自らが発見した新史料によって明らかにすること自体、実証史家の面目躍如であり、驚くべき成果であると言える。

もちろんこうした新事実が発見されたのは、独亜関係史という新しい視点によって得られた側面も大きい。そもそも一国の外務省を中心的アクターとした外交政策を取り上げる「外交史」と異なり、「関係史」は、どちらかの側に中心軸を置くのではなく、相互関係性による双方への政治・経済的影響やその歴史的帰結を多面的に分析するという特色を持つ。外交史はいわば一国史であり、関係史は複数の国家や地域に対象が広がるのである。本書ではドイツ、日本、「満洲国」、

アメリカ、中華民国を、阿片を媒介として縦横無尽に結びつけている。こうした分析視角においてはマルチアークイヴァルな研究が不可欠であるが、著者は中国語を含む複数の言語の史料を読み込み、多地域・多言語の史料を関係史の文脈で辿ることによって、新しい史料群と事実発見に至ったのではないだろうか。

それでは、なぜ本書はこれほどまでに広範囲にわたる関係史を叙述することができたのだろうか。それは国家ではなく大豆や麻薬を中心的な分析対象に置いたからであろう。著者は川北稔の『砂糖の世界史』や鶴見良行の『ナマコの眼』を例に挙げて、「モノを素材に一国史の枠組みを超えて、横断的に世界史を叙述することが試みられてきた」（本書2頁）として、世界中で取引される国際商品としての大豆と麻薬の動きを追いながら、それらにかかわる国家の通商・外交政策を配置していくのである。その結果、本書は極めて多様な国を舞台としながら、まったく一貫した分析となっているのである。

こうした手法は、「モノのグローバル・ヒストリー」に該当する。グローバル・ヒストリーは西洋中心主義と一国史観を批判するために関係性や比較を手段として用いるが、国境を越える関係性を描くための手段としてしばしば「モノ」に着目する。例えば香辛料、綿花、紅茶、コーヒーといった国際

商品である。キャロル・グラッグによれば、それは「おおよそ経済的価値のある物質をとりあげ、その動きを追う」ことで、分析的な意味でグローバルなマクロ・ヒストリーの物語を作ったり、批判したりするもの⁽²⁾である。本書は大豆と麻葉という国際商品のトランスナショナルな交換と移動を中心として、ドイツや日本といった国家の役割を脱中心化し、さらにその分析の結果、第二次世界大戦の独亜関係史における暗部——例えば「安楽死」作戦やアウシュヴィッツの人体実験といった歴史にまで切り込み、さらには賠償金を断念したはずの中華民国が事実上の賠償金を阿片売却によって獲得していたというような、一国史ではまず発見することのできない新たな歴史を浮き彫りにする射程を獲得している。まさに「モノのグローバル・ヒストリー」の成功例である。

ドイツ現代史におけるグローバル・ヒストリー研究は多くないが、例えば代表的なグローバル・ヒストリー専門雑誌である *Journal of Global History* の第一二号(二〇一七年)では、「枢軸の帝国——ファシズム帝国主義のグローバル・ヒストリーに向けて」と題する特集が組まれている。そこに掲載されたカウナーの研究では、第二次世界大戦期のドイツと日本との軍需物資調達関係が研究され、東南アジアでの軍需物資の調達と移送や、封鎖突破船から潜水艦への移行についても

書かれている。しかし麻葉には全く言及がないし、独・伊・日の国家間関係に重点が置かれた「枢軸国中心」の叙述になっている上に、主に二次文献に依拠しており、実証的な成果ではない⁽³⁾。これに対して本書はあくまで麻葉を中心とすることによって、枢軸国だけでなく中華民国やアメリカをも射程に収め、まさに縦横無尽に麻葉をめぐるグローバル・ヒストリーを実証的に描いており、カウナーの研究よりもはるかに優れている。この分野における新たな地平を拓いた研究といえるのではないだろうか。

四

このように本書は、独亜関係史という新しい分野としても、グローバル・ヒストリーとしても、現時点で最も重要な研究であることは間違いない。ほとんど欠点の無い本書に対して問題点を指摘することは困難であるが、全く的外れとなることを覚悟の上で、いくつか疑問点や「ないものねだり」的な要望を、以下で述べておきたい。

まず気になったのは、素朴な疑問ではあるが、「麻葉の世紀」というタイトルの意味である。本書の射程はサブタイトルにある通り、膠州湾がドイツに租借された一八九八年から関東

軍阿片を日本が買い取った一九五〇年まで、ほぼ二〇世紀の前半に該当する。それでは「麻葉の世紀」は二〇世紀を指すのであろうか。そうであれば、どのような意味で二〇世紀の前半）が「麻葉の世紀」であったと言えるのであろうか。本書ではその点についての詳細な説明がなく、タイトルから想起されるような二〇世紀論としての議論がなされなかった。少なくともタイトルの意味するところについて、何らかの定義が示されるべきではなかったであろうか。

次に、阿片をめぐる関係史を辿るうちに浮かび上がってくる、ドイツと東アジア以外の地域に関する分析が弱いのではないかとこの疑問を持った。本書の分析においては、特に「満洲国」からドイツへの阿片の輸送において封鎖突破船や潜水艦が用いられ、そのルートは昭南（シンガポール）を重要な経路としていること、「大東亜共栄圏」の諸国で阿片の専売制が敷かれ、そこでの阿片の売買のためにドイツ向けの阿片供給が滞りがちであったこと、それがインドやイランからの阿片供給の途絶によるものであることが説明されているが、これらの断片的な情報から、阿片をめぐる独亜関係において東南アジアが重要であることは明らかである。しかし、本書では詳細な分析がなされず、「あとがき」で紹介されたように、別稿で論じられることになった。⁽⁴⁾

もしこの別稿が本書に組み込まれていれば、本書の射程は東南アジアやインド洋に及び、さらに広域において「麻葉の世紀」の全貌が示されることになったのではなかったであろうか。別稿が用意されているとはいえ、できれば本書一冊に収められていたほうが研究上の価値はさらに高まったと思われる。

他方で、ナチス・ドイツにおける阿片政策については、第五章の第二節で分析されているが、ここではホルツァーやクレーの著作に多くを依拠しており、他の章における史料的な密度に比べるとやや薄いように感じられる。そのこともあってか、本節における阿片・モルヒネ政策がどのように「満洲国」の阿片と結びついているのか、いないのが曖昧であるように思われる。第四章で詳述されているように、ナチス・ドイツが「満洲国」の阿片を特に必要とするようになったのは、トルコとの関係が途絶する一九四四年後半からであり、その期間はわずかであった。しかも別稿において、ドイツが購入した阿片は東南アジアでの重要物資と交換するために用いられた可能性があり、そうするとドイツで使用する「満洲国」の阿片はさらに少なくなる。本書においては、「戦時中に『満洲国』から輸入された大量の阿片の一部が、実際にこれらの用途に利用されていた可能性は否定できない」（本書一二

○頁」と述べられているが、時期や量を考えると、やはりトルコからのものが比重としては多かつたと考えられないだろう。しかし、独「満」阿片貿易の期間以外におけるナチス・ドイツ阿片調達の分析には、独土関係の史料を必要とするところになる。これは本書の分析範囲を大きく超えており、「ないものねだり」の疑問点である。

五

以上、非常に雑駁ではあるが、本書の特長と疑問点を述べさせていただいた。著者の圧倒的な研究の蓄積に対して、自分の能力が及ばず、全外的外れな指摘ばかりになっていることと思われるが、御寛恕を願うばかりである。いずれにせよ本書は、独亜関係史研究の金字塔として後年にわたって参照され続ける重要な研究であることは疑いない。また、評者としては、日本の現代史研究においては数少ない、実証的なグローバル・ヒストリー研究として積極的に評価したい。これまで日本のグローバル・ヒストリー研究は一九世紀までのイギリス帝国や海域アジアに偏っていた印象があるが、本書は現代史におけるグローバル・ヒストリー研究の一つの方向性を示すものとして、これを模範とする研究の登場が期待され

よう。

注

- (1) 田嶋信雄・工藤章編『ドイツと東アジア——一八九〇—一九四五』東京大学出版会、二〇一七年。
- (2) キャロル・クラック（梅崎透訳）「転回するグローバル・ターン」成田龍一・長谷川貴彦編『世界史』をいかに語るか——グローバル時代の歴史像』岩波書店、二〇二〇年、六七—六八頁。
- (3) Rotem Kowner, "When economics, strategy, and racial ideology meet: inter-Axis connections in the wartime Indian Ocean", in: *Journal of Global History*, 12:3 (2017), pp.228-250.
- (4) 熊野直樹「ナチ阿片と『大東亜共栄圏』」『法政研究』第八六巻第三号（二〇一九年）、六三一—六五九頁。